

作業療法士がファシリテーターを担うことで支援の統一とエンパワメント向上を実現した事例

○佐々木 章之祐¹⁾

1) こどものつむぎ1号

Keywords: 小児, 情報共有, エンパワメント

【はじめに】

小児分野の多機関・多職種連携は、国が進める包括的支援体制の構築において、重要な課題となっている。これについて、サービス担当者会議や個別支援会議が連携の場として設けられ、顔の見える関係性の構築は進んでいるが、情報共有に留まり、クライアントのために各関係機関が役割分担をし、協力し合うといった多機関連携の質が高まることには至っていないと筆者は感じている。先行研究においても作業療法士（以下 OT）が関わり、多機関連携の質が高まったという報告は見当たらなかった。本報告は、作業療法士がファシリテーターとして関わった支援会議後、各関係機関が役割分担をし、連携を図るということを主体的に、そして継続的に行うことができるようになった一事例である。本事例を通して、関係機関の主体的な連携に対する OT の役割について考察する。なお、報告にあたり対象児及び保護者の同意を得ている。

【事例紹介・方法】

対象は、染色体異常を有する高校3年生の男子(以下、A 君)。日常生活動作は全介助で、中等度の医療的ケアを要する。特別支援学校に在籍し、保育所等訪問支援(月1回)、放課後等デイサービス(当施設含む3事業所)を利用している。各関係機関の支援の一貫性と連携強化を目的に、学校内にて実技カンファレンスを開催した。通常は相談支援員が支援学校の教員が司会進行役を担い、ファシリテーターは存在しないのだが、今回は OT がファシリテーターを担い、A 君へのストレッチやポジショニングの方法を実演しながら説明した。更に、参加者にもその場で実践してもらいつつ、目標・身体機能・支援目的・介入方法を共有した。OT はそれぞれの参加者に対して、「〇〇(関係機関)では同様の物品がありますか？」と各関係機関の環境や状況を引き出す問いかけや、ストレッチやポジショニングの際に活用した物品がない場合に、参加者に課題解決を促す問いかけを行い、代替案の提案も加えながら意見交換を促した。

【結果】

OT がファシリテーターを担ったことで支援内容や目的が明確となり、実技カンファレンスの進行も円滑に行われた。実技を交えた共有により、「実際の動きをやってみて理解が深まった」といった意見が多く聞かれた。また、実技カンファレンス中に各関係機関の環境や状況を引き出す問い掛けや、参加者に課題解決を促す問いかけをすることで、これまでは情報共有で留まっていたが、徐々に「自施設では、これが使えるかも」といった主体的な発言を引き出すことに繋がった。更に、自施設での工夫された活動内容を定期的に保護者や相談員を通じて他機関に共有するようになり、各関係機関の支援の方向が整理され、統一が図られた。その結果、参加者からは、「自分たちの支援に不安があったが安心できた」といった前向きな感想が得られた。また、実技カンファレンス後も継続して、今まで見られなかった学校から他機関への引き継ぎ時に詳細な共有が行われ「自施設では〇〇を試します」といった形で役割分担した支援が1日の流れの中で実現されるようになった。

【考察】

本事例では、OT が各関係機関の発言を促し、自身で課題解決するように会話をファシリテートした。これらは、支援者が自らの専門性を再認識するとともに、チームアプローチの一員である自覚を深める機会を提供したと考える。OT がファシリテーターの役割を担い、実技を交えた支援共有と具体的な問いかけを行うことは、各関係機関が支援会議の「主人公」として主体的に関与することを促し、支援の方向性の明確化と統一が図られるだけでなく、各機関のエンパワメントの支援に繋がり、多機関連携の質を高めるのではないかと考える。今後、より多くのクライアントの支援会議において、OT がファシリテーターを担う機会を作り、実技を交えた支援共有と会話をファシリテートすることが、支援の統一化と関係機関のエンパワメントを促進するかどうかを検証したい。